
彼らは二度と会えぬ

神室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らは二度と会えぬ

【Nコード】

N2804Z

【作者名】

神室

【あらすじ】

『万事屋』

彼らは幸せだった。ただ、一緒にいられることが。

一緒に泣いて、怒って、喜んで、悔んで、笑って……。

いつまでもこんな幸せが続いてほしかった。

ただ、それだけだったのに……。

記憶

初めまして。

神室と申します。初めてなんです・・・。

私は色々な小説を読むだけでしたが、書いてみるがなくてですね。なので、今回は書いてみるに挑戦したいと思います。

しかし、学校でも書くことはありますが何故友達に見せるくらいのものでして。

だから、きっと上手くは書けておりません。

出来れば温かい目で見てやってください。

コメントは来るのかな？悪いコメント受けないかな？いいコメントは？

・・・といつも不安に思ってしまうのですが、また温かい目で直視してあげてください。よろしくお願いします。

悲しき運命

なんで・・・。

なんで僕らがこんな目にあうんだろう？僕らは何もしていないのに。

「おい、新八。」

声がした。万事屋の社長席から。懐かしく、温かい声が。

「・・・!!」

振り向いた。

「・・・いない。」

いつも邪魔くさい白銀の天然パーマが。死んだ魚のような目が。いない。イナイ。坂田銀時が、いない。どこにも。

「・・・」

「新八？何やってるネ？」

「神楽ちゃん・・・」

同じ万事屋でバイトしていた夜兎族の少女、神楽。いつもは明るい声なのに、今日は声が曇っていた。大きく愛らしい目が真っ赤に腫れていた。きつと、沢山泣いたのだろう。

僕と同じように。

事件が起きたのは、三日前のことだった。

「はい、どーも。万事屋です」

腐抜けた挨拶で電話に出る万事屋の一人、坂田銀時。

死んだ魚のような目。クリツクリの天然パーマ。

こうみえて、彼は、攘夷戦争の時『白夜叉』と恐れられていた男。

しかし、今は万事屋を営んでいる男だ。

数時間前の時

電話に出て、数十分ほど話した後。

「おい。新八。神楽。仕事依頼だぞ。」

部屋中に聞こえるような大きな声で銀時は叫んだ。

返事が返ってこない。

不思議に思った銀時は、いつも神楽と定春が寝ている押入れを覗き込んだ。

垂れ幕になぜか「ピ○子」とかいてあるだけだった。

「定春。」

「アンツー！」

定春だけは家にいたらしく、出てくるや否や銀時の頭に食らいついた。

「離れろって！！今、二日酔いで頭ガンガンしてんだよ！」

定春はしぶしぶ銀時の頭から離れた。

「たつく。おい。神楽はどこ行った？」

すると定春は玄関に置いてあった紙切れをくわえて銀時に見せた。

『公園に行ってくるアル。何かあったら定春と来るヨロシ。』

銀時は呆れた顔で玄関に残ってる神楽愛用の傘を見つけた。

いつも神楽はこの傘をさして陽の光が苦手だから必ず持っていくはず。

それに、今日は陽がカンカン照りだ。

「・・・・・・・・・・」

銀時は定春に目をやった。

定春は銀時を見つめるだけだった。しかし、なにか言いたげな顔をしている。

「こうなったら・・・テレレテッテレ〜〜！！！！（銀時裏声）」

つつこみがないことを忘れていた銀時は笑ってくれる人もいないので、

「すべったな。あゝあ。なんで一人ですべんなきゃならねーんだ・・・。」

まあいい、と猫だか犬だか何の生物だかわからない模様をしたカラ

神楽・新八探し（前書き）

ここから少しギャグっぽくなります。

神楽・新八探し

銀時は定春をつれて、神楽が向かったと思われる公園に行った。

そこには、なぜか人だかりができていた。

「何やってんだ？」

よく見ると見覚えのある赤いチャイナ服。そして明るいオレンジの髪。黒い雪洞をつけた少女。

「オラア！私が勝ったネ！！酢昆布一年分上納するヨロシ。」

「一年分って酢昆布の一日の摂取量が分んねえよ。」

神楽だった。やっぱり神楽だった。何があっても神楽だった。

もう一人、神楽を見下ろしている人物がいた。

明るい茶髪。くりつとした瞳に幼さが残る顔立ち。真選組一番隊隊長沖田総悟だった。

奴は甘いマスクのサドスティック星の王子だ。（つーか仕事中心じゃねーのかよ。）

「つーか、俺がすこーしよそ見した瞬間に『隙ありネ！！』って言いやがって。」

「ふん！よそ見たお前が悪いネ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銀時はとりあえずこの場所を離れたかった。しかし・・・

「あつ！銀ちゃん！聞いてよ。コイツ、負けを認めないアルヨ〜
！！！！」

「あーもう。何があつたか聞いてやらあ！」

神楽に聞いてみると、

1時間ほど前、神楽がマダオを殴って遊んでいたら、沖田が

「おい、そのチャイナ娘。なにやっていやがんでい。」

と、沖田が注意してきたらしい。

「人のこと殴って遊ぶたア、とんだサディスト怪力娘だな。」

「お前に言われたくないあるヨ。この変態『ピーーーーーー』が。」

「おー。言ってくれんじゃねーか。この『ピーーーーーー』
「ーーーー」が。」

で、勝負したところ神楽が勝つたらしいが。なんの勝負かはまだ不明だ。

神楽・新八探し（後書き）

あら、続き思いつかないんでまた次回――――！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2804z/>

彼らは二度と会えぬ

2011年12月31日21時51分発行